



## 墓 参

### ～りんへの思い～

故郷の詩人石垣りんについて、小長谷源治さんが4回にわたり、その作品や人物像を紹介してくださいました。それによって石垣りんという人物がどんな詩を書き、どんな人柄の人であるか教えてくださったように思う。

読書会でも、二度ほどりんの詩集を取り上げたこともあり、私はりんの詩に心を寄せていたのであるが、りんのパンフレット作りに参加させてもらったことにより、さらに深くりんの略歴やその背景にあるものを同性の立場として改めて考え直したのである。

そしてある日、ちょうど秋の彼岸の中日であった。図書館司書の外岡さんと湊の大野さんと女性三人で子浦にあるりんの墓を訪れた。

墓は浄土宗の古刹、西林寺にある。その昔、徳川14代将軍、家茂公が寄港され、記念に植えられたというお手植えの松が、屋根の高さを越すほどに成長していた。

住職は彼岸とあって庭の落ち葉を掃いていられた。「りんさんのお墓参りに参りました。」挨拶すると、住職は竹箒の先で地面に墓のありかを示してくれた。その地図どおり登っていくと急に視界が



詩碑（子浦：西林寺）

開け、妻良、子浦の湾が一望の元に見渡せた。海は蒼く静まり、左手には山の緑が、そして民家と白い渚がまるで絵はがきのように眺められた。

りんも幾たびか、この風景を眺めたことだろう。石垣家の墓は墓地の絶える外れの方にあつた。墓石は二基、祖母さくと母すみの墓は別であるらしい。りんは母すみの墓に埋葬されているようである。墓石の後ろにはまだ新しい塔婆が立てかけられ、それには“文誉詩章鱗光大姉”とあつた。

「なぜ鱗なの、凜の方がいいのに」三人は勝手なことを言いつて帰ってきたが、戒名にはそれなりの理由があつてつけられるものであろう。あとでわたしは考えた。それこそ、りんは動くことなくあそこにいるのだから、晴れた日、雨の日、見るのは海ばかり、退屈なとき、詩人の魂は海の中を自由に泳ぎ、銀鱗をひらめかせる魚の群れを想像

するかもしれない。そう思えば、納得できる戒名であるかもしれない。

墓参してわたしの心に残つたのは、黒い大理石の詩碑である。二基の墓の隣に真新しく建てられたものには「契」と刻まれていた。

### 契

海よ言うてはなりませぬ  
空もだまっていますゆえ  
あなたが誰で私が何か  
誰もまことは知りませぬ

これはりんが亡くなってから出版された5冊目の詩集「レモンと鼠」に出ている詩である。この短い詩は今もわたしの心の中に残り、りんの心を探る手がかりとなっている。

(鈴木さつき・読書会ルクチュール代表)